

大英博物館 北斎 一国内の肉筆画の名品とともに一

サントリー美術館（六本木） 2022.04.16～06.12

「葛飾北斎」(1760～1849)は、あと5年の命を与えてくれたら「真正の画工」になれるのにと、90歳の臨終にそう漏らしたという偉大な巨匠である。

「大英博物館」は、1860年に初めて作品を購入してから収集を続け、現在では「1,000点」を超す世界最大級コレクションを有する博物館として名高い。

本展は、当館に多数所蔵されている人気絵師「北斎」の70年におよぶ画業の変遷に、円熟期の晩年30年間に焦点を当てた肉筆画名品を展示している。

北斎は、世界でも最も有名な芸術家の一人で、「大英博物館」には複数のコレクターから入手した優品が多数所蔵されている。ごく最近フランス人コレクターが所有していた作品で、1948年にパリでされてから、2019年にオークションに現れるまで、個人蔵として忘れられていた「版下絵」が発見されて、「北斎:万物絵本大全図」展がロンドンで開催されて注目を浴びている。

葛飾北斎 《為朝図（ためともず）》 1811年・江戸時代 絹本着色 1編



画伯が「戴斗（たいと）」という画業を名乗っていた50歳代の作品「怪力の源為朝の弓を、男たちが力づくで引こうとしている」作品である。曲亭馬琴の小説『椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）』の完成を祝って描かれた肉筆画は、金の切箔がまかれるなどとても手の込んだ迫力のある作品である。



諸国瀧回り 和州吉野



百物語 笑ひはんにや



流水に鴨図